

ビル建設工事に伴う

宮ノ下遺跡第10次発掘調査報告書

—東大阪市足代地域における足代分流路の形成と歴史時代の人間活動の変遷—

1999.4

財団法人 東大阪市文化財協会

例 言

1. 本書は財団法人東大阪市文化財協会が、住友生命保険相互会社の委託を受けて1998年4月28日～5月29日に実施したビル建設に伴う宮ノ下遺跡第10次発掘調査の報告書である。
2. 調査・整理にかかる費用はすべて住友生命保険相互会社が負担した。
3. 現地調査・整理および本書の執筆・編集は財団法人東大阪市文化財協会調査員別所秀高が担当した。
4. 調査時の写真撮影、および遺物の写真撮影は別所がおこなった。
5. 調査に参加した補助員は、梶浦泰久、西村和浩、川嶋千尋の3名である。
6. 現地の基準点設置は株式会社ワールドが実施し、平面座標には平面直角座標系を用い、標高は東京湾平均潮位 (T.P.) を基準とした。
7. 調査にあたっては、住友生命保険相互会社をはじめ、株式会社日建設計、株式会社竹中工務店、株式会社島田組の関係者各位の尽力を賜った。また、本協会職員各氏から有益な教示を得た。これらの方々に感謝いたします。

目 次

本 文		図 版	
第1章 はじめに	1	図1 宮ノ下遺跡の推定範囲と周辺の微高地・旧街道	1
第2章 層序	6	図2 近鉄布施駅周辺のボーリング柱状図の層序対比	1
第3章 遺物・遺構	12	図3 東大阪市西部域の遺跡分布	3
第4章 まとめ	16	図4 宮ノ下遺跡第10次調査地点の堆積柱状図	6
		図5 調査地東壁断面(上)および北壁断面(下)	7
		図6 1層除去後の遺構検出状況	8
		図7 調査地北西隅(西壁)の1～10層の堆積層	8
		図8 北壁断面(東端部分)	9
		図9 東壁の11～19層の堆積層	10
		図10 東壁の18～26層の堆積層	10
		図11 貝によって擾乱された水平層理	10
		図12 遺構分布復元図(右上)と遺構検出状況(左下)	12
		図13 DC-1の横断面(東壁)	13
		図14 調査地北半中央部の南北トレンチでみられたDC-1の堆積相	13
		図15 DC-1下部で検出したヒシの子葉	13
		図16 DC-1上部出土漆器椀	13
		図17 DC-1上部出土土器	13
		図18 DC-1下部出土土器	13
		図19 「放出道」周辺にみられる水路およびため池	14
		図20 DC-2の堆積層(北壁)	14
		図21 DC-2の東側谷壁付近	14
		図22 DC-2下部出土土器	15
		図23 DC-2中部出土土器	15
		図24 FW-1	15
		図25 FW-1の垂直断面	15
		図26 FW-1出土土器	15
		図27 大部分を後世のDC-1に削平されたDC-3	15

第1章 はじめに

調査の経過

宮ノ下遺跡は北から西および南側にかけて中・上部更新統に、東側を生駒山地に囲まれた河内平野の中央部、大阪府東大阪市長堂および足代新町の近鉄布施駅北側で楕円状に広がっていると考えられている（東大阪市教育委員会 1996）。本調査地点は遺跡推定範囲の北西隅の長堂1丁目64-6番地で、現地表高は約2mである。本調査地は1996年までスーパー「イズミヤ」が営業していたが、敷地の東半部を通る都市計画道路渋川放出線の新設にともなって撤退し、住友生命保険相互会社が「イズミヤ」跡地の南半部についてビル建設を計画したために調査に至った。

周辺の地形・地質

空中写真や地形図を詳細に観察すると遺跡推定範囲の西側および南側に微高地が認められ、遺跡推定範囲の大部分を覆っていることがわかる（図1）。これまでの宮ノ下遺跡の調査では、古墳時代後期以降に堆積した流路堆積物や洪水堆積物が見つかっており、この微高地はかつての大和川の分流が形成した自然堤防と考えられる。

ボーリング柱状図（図2）によれば、宮ノ下遺跡周辺の地下浅層は砂が卓越する層と泥が卓越する層が交互に重なり合った砂泥互層で構成されている。No.2のM4層最下部の材の¹⁴C年代は5,690y.B.P.を、No.5のM2層最下部のカキ化石は>30,000y.B.P.を示し、すべてのボーリング地点においてS3層はS4層に比べてN値が高いことから、S3層は天満層（低位段丘構成層）、M3層以浅は難波累層（沖積層）にそれぞれ相当する。また、那須・樽野（1981）の「河内平野東西地質断

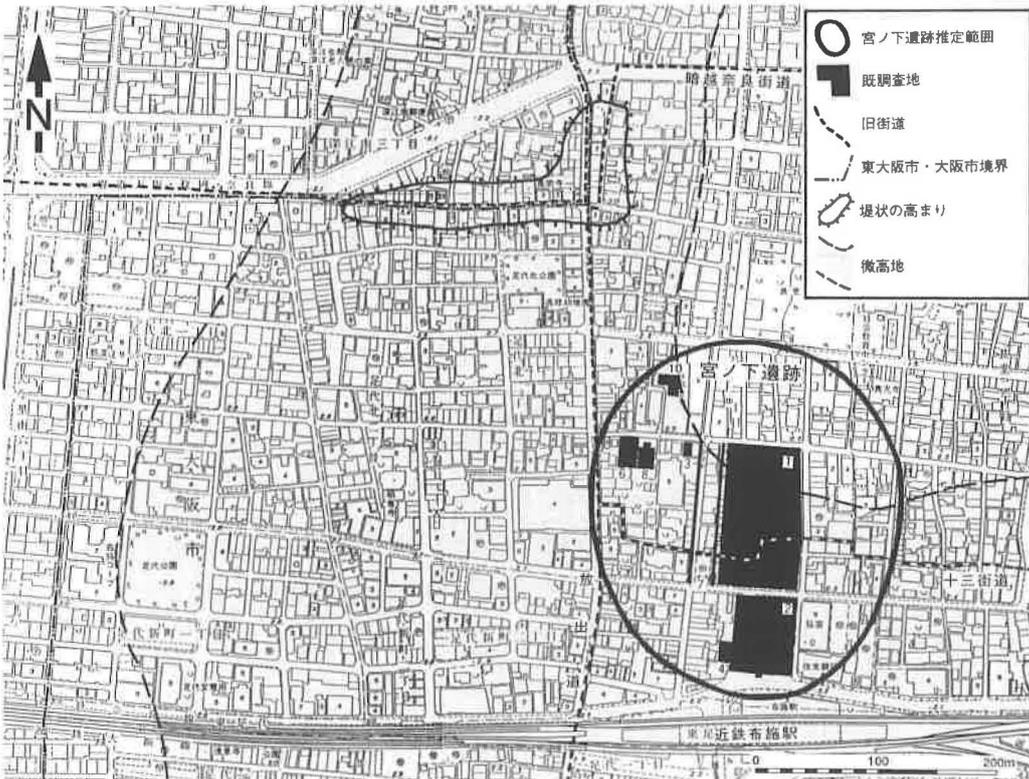


図1 宮ノ下遺跡の推定範囲と周辺の微高地・旧街道

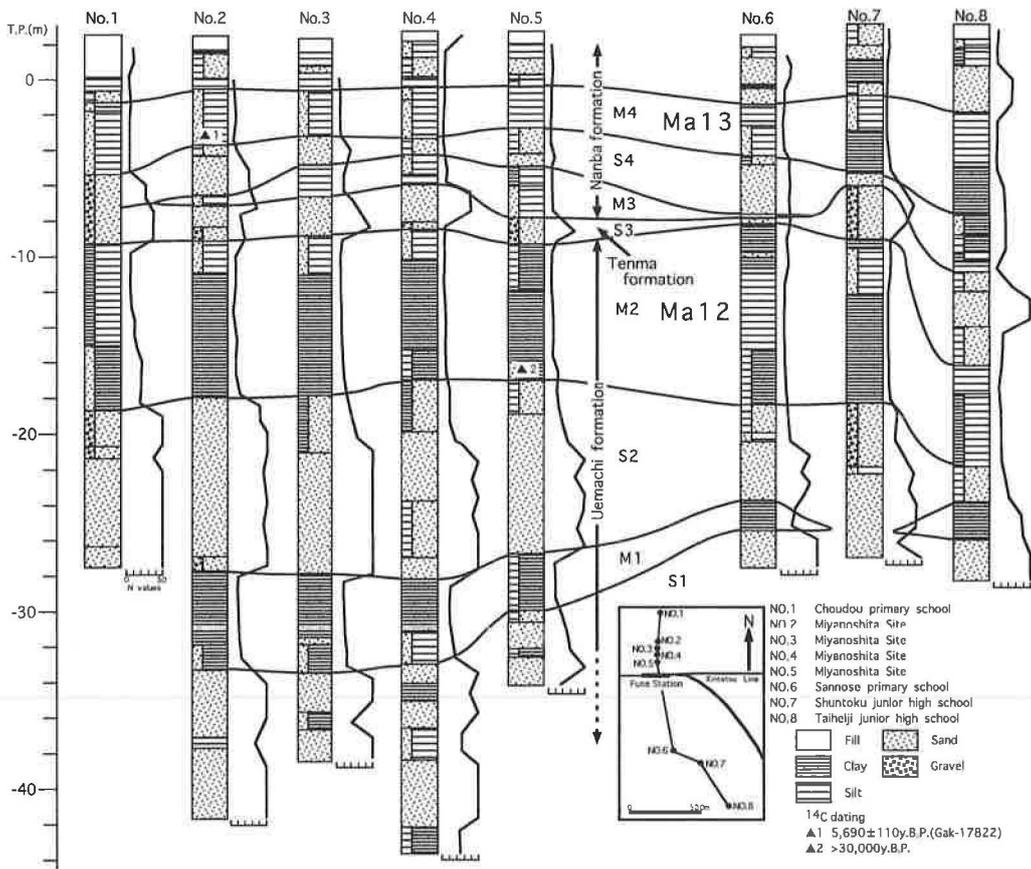


図2 近鉄布施駅周辺のボーリング柱状図の層序対比

河野ほか(1992)、東健地質株式会社(1991)、株式会社東京ソイルリサーチ(1993)をもとに作成。

側隣接する「布施駅北口地下駐車場」建設工事に先行して行われた第2次調査では、谷の続きや周辺の水を谷へ排水するための溝などが見つかった(別所1996b)。第3次調査でも同様の溝と弥生時代中期の遺物を確認した。第3次調査までは、より上位の層準で中世の遺物が散見されていたものの調査の対象にはならなかったが、第4次調査で古代・中世の遺物を含む堆積層がはじめて確認され、以降の調査ではこれらも対象に含まれることになった。また、貝塚が埋没していた浅い谷の続きがこの調査でも検出され、この谷は相対的な海水準の低下によって形成されたものであることが指摘された。これらの調査では、河内平野中央部における縄文時代～弥生時代の古環境変遷を明らかにするための様々なデータを得ることができた。

第6次調査では奈良～明治時代の水田跡や畑の耕作地跡、井路跡、鎌倉～室町時代の建物跡が検出され、堆積相の分布や土地条件図から調査地西方にかつての流路があり、自然堤防の上で集落が形成されていたことが推測されている(松田1997)。第6次調査地点より西側で行われた第7次調査では予想どおり、集落跡を想起させるような高密度で分布する平安～鎌倉時代のピットのほか、井戸、耕作地跡、井路跡が、東側隣接地の第8次調査(中西1998)でも同時期の井戸、耕作地跡、井路跡が検出されている。これらの平安～鎌倉時代の集落跡や耕作地跡は、妙心寺文書の「後村上天皇綸旨案(正平5年7月11日)」・「北畠親房寄進状(同年12月5日)」・「河内国司庁宣(同年12月9日)」・「師守記(延文元年3月10日)」・「後円融天皇綸旨(康暦2年3月20日)」にみられる「足代庄」、「大乘院寺社雑事記(延徳3年9月16日・18日条)」にみられる「網代庄」(平凡社1986)の

面図」や趙(1994)の「古大阪平野の地質とおもな旧石器遺跡の分布」を対照すると、M2層はMa12(中位段丘構成層)に相当する可能性が高い。

既調査成果

宮ノ下遺跡は1992年2月に、「ヴェルノール布施」の建設工事に先立って行われた試掘調査で発見された遺跡で、これまでに財団法人東大阪市文化財協会によって8回の本調査が実施されている(図1)。「ヴェルノール布施」建設予定地内で行われた第1次調査では、浅い谷の中に形成された縄文時代晩期～弥生時代の貝塚が(別所1996a)、南

一画に比定される。なお、もとは字北町にあったとされ（布施市史編纂委員会1962）、現在足代1丁目にある足代地蔵尊には「永禄十年戊壬十月廿四日 河内國洪川郡足代庄」の銘があり、荘園制度の崩壊期にもとの領主にとって代わった新興支配勢力に抵抗した在地農民の証であることがうかがわれる。第6次調査以降の調査成果を考慮すると、宮ノ下遺跡の中世の集落跡は現在の推定範囲より西側の足代北2丁目、足代新町2丁目付近まで広がっていると思われる。

布施の旧街道

宮ノ下遺跡の北側には東西にのびる「暗越奈良街道」、西側には南北に延びる「放出道」、遺跡地を東西に横断し南東方にのびる「十三街道」がある（図1）。これらの旧街道がいつごろ整備されたのかよくわかっていない。「布施市史」は平城京から難波宮への行幸のさいには、「暗越奈良街道」が難波宮と平城京をむすぶ最短ルートであると述べ（布施市史編纂委員会1962）、奈良時代にはすでに整備されていたことを示唆している。また、「放出道」は別名「左専道（させんどう）」とよばれ、菅原道真が筑紫（太宰府）へ左遷される道中、道明寺（現藤井寺市）へ立ち寄ったときに往来した道といわれる（角川日本地名大辞典編纂委員会編1982）。これら諸街道の成立に関しては考古学的な調査成果が待たれるところであるが、「放出道」と「十三街道」は図1に示した旧大和川の分流が形成した自然堤防に沿ってのびていることから、当地周辺で流路が固定されたのちに整備されたと考えられる。近世の「暗越奈良街道」はお伊勢参りの人々でおおいに賑わったようで、人々は足代や深江付近の街道沿いで菅笠を買い、奈良方面へ向かったといわれる（藤井1983）。この菅笠は「河内笠」と呼ばれ、足代、高井田、森河内、深江で多数生産されていた（布施市史編纂委員会1962）。

宮ノ下遺跡近傍を通るこれら3つの旧街道は、明治22年の大阪鉄道湊町・柏原間（現JR大和路線）、明治26年の浪速鉄道相生・四条畷間（同学研都市線）、大正3年の大阪電気軌道上六・奈良間（現近鉄奈良線）の相次ぐ鉄道開通により街道としての往時の賑わいがなくなりましたが、近年近鉄布施駅の周辺は市内最大の商業地として栄えている。

東大阪市西部の遺跡

宮ノ下遺跡が位置する東大阪市西部域ではあまり遺跡が確認されておらず、調査事例も少ない。これは本地域が河内平野堆積盆の中央部に位置し、地下深くに遺跡が埋没しており、本来存在する遺跡を見つけにくかったためと思われる。しかしながら、1992年の宮ノ下遺跡の発見以来、今後も東大阪市西部域で新たに遺跡が見つかる可能性があることが関係者に再認識された。とくに、旧大和川の分流が形成した自然堤防上には、古代以降の遺跡が埋没していることが予想される。東大阪市西部域の遺跡分布図を図3に示す。

高井田遺跡は宮ノ下遺跡の北方1.5kmの自然堤防上に位置する。1963年に下水道管理設工事で発見されて以来、布施市教育委員会、河内考古学研究会、東大阪市文化財協会によって3回の調査がおこなわれ、弥生時代前期～中期初頭の遺物・ピット・溝・杭列、6世紀後半から7世紀初頭の須恵器・土師器などが見つかっている（布施市教育委員会1963、原田1984）。このうち、第1次調査で出土

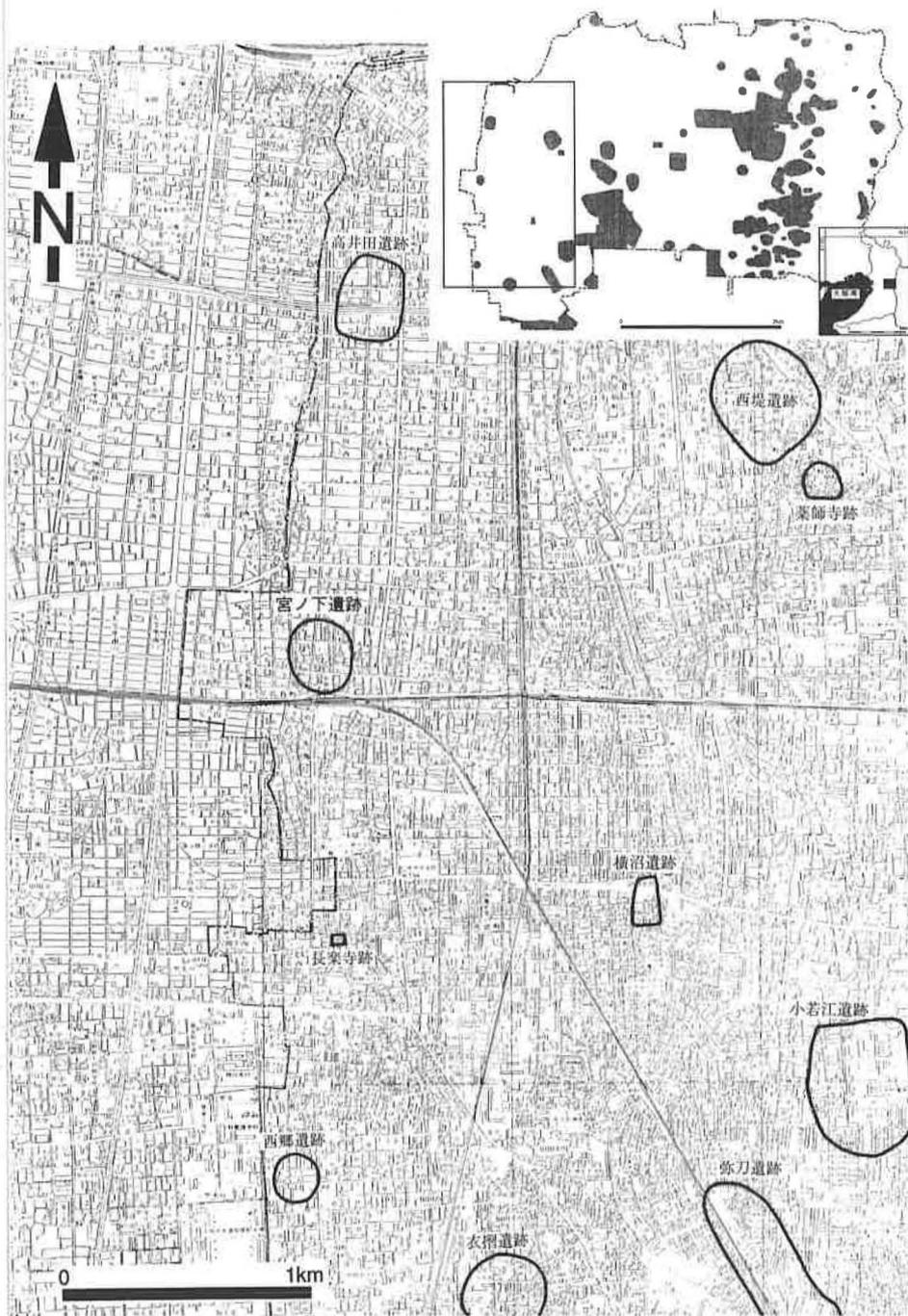


図3 東大阪市西部域の遺跡分布図

市教育委員会、東大阪市遺跡保護調査会、東大阪市文化財協会などによって8回の調査がおこなわれ、古墳時代前期の土師器・ピット・土壙・井戸、古墳時代後期の須恵器・土師器、平安時代～鎌倉時代の土師器・黒色土器・瓦器・建物跡・井戸・溝・土壙などが確認されている（下村1980・1992、芋本1989、原田1990）。また、近鉄大阪線沿いにある近鉄弥刀変電所内では、かつて奈良時代の人面墨書土器がみつかり、これは現在名古屋市立博物館が所蔵している。

薬師寺跡、長楽寺跡、横沼遺跡、西郷遺跡については、工事や試掘調査のさいに数点の遺物が見つかっただけで、本調査は実施されていない。衣摺遺跡についても衣摺3丁目在住の白井孝次氏が所蔵する、明治42年に邸内で井戸を掘削したさいに見つかったとされる弥生土器（長瀬農業協同組合1983）があるだけで、邸宅周辺での調査例はない。

した弥生時代前期～中期初頭の土器に、朝鮮系無文土器が含まれることが指摘されている（田代1985）。

西堤遺跡は宮ノ下遺跡の北東方2kmの自然堤防上に位置する。1968年に下水道管埋設工事で発見された。これまでの調査では、5世紀末から6世紀の須恵器・土師器、ウシ・ウマの骨、平安時代の土師器、公朝十二銭の一つである「承和昌寶」などが出土した（下村1977）。

小若江遺跡は宮ノ下遺跡の南東方3kmの自然堤防上に位置する。1940年に日本大学大阪専門学院（現近畿大学）構内で発見され、かつては「長瀬」遺跡と呼ばれていた。発見当時は調査がおこなわれなかったものの、工事中に地下3～7mで多数の遺物が採集された。採集された遺物には、弥生時代中期の土器、古墳時代前期の土師器、同後期の須恵器・土師器や蓋形埴輪・円筒埴輪がある（布施市史編纂委員会1962）。近年になって近畿大学や東大阪市文化財協会によっても調査が実施されており、奈良・平安時代および中世の遺物や遺構が確認されている。

弥刀遺跡は宮ノ下遺跡の南東方3.5kmの自然堤防上に位置する。1963年に市立弥刀小学校の校舎建築工事のさいに発見された（辻合ほか1964）。これまで東大阪

文 献

- 芋本隆裕 1989 弥刀遺跡第5次発掘調査概報。「東大阪市文化財協会概報集－1988年度」
- 角川日本地名大辞典編纂委員会編 1982 「角川日本地名大辞典 27 大阪府」
- 河野俊宏・木村武史・園部聡也・松尾秀樹 1992 地盤情報データベースの構築とその活用に関する研究－東大阪市域の地盤を対象－。大阪工業大学平成3年度卒業論文, 56-67.
- 下村晴文 1977 「村上学園校舎増築工事に伴う西堤遺跡調査概報」, 東大阪市教育委員会
- 1980 弥刀遺跡発掘調査概報。「東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集－1980年度」
- 1992 弥刀遺跡第7次発掘調査。「東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要－平成3年度－」, 東大阪市教育委員会
- 株式会社東京ソイルリサーチ 1993 布施駅北口交通広場地下駐車場建設敷地土質調査報告書。
- 東健地質株式会社 1991 布施駅北口再開発事業に伴う土質調査報告書。
- 田代 弘 1985 畿内周辺部における「朝鮮系無文土器」の新例。森浩一編「同志社大学考古学シリーズII 考古学と移動・移住」, 225-233.
- 趙 哲済 1994 大阪平野の旧石器遺跡－特に古大阪平野における遺跡の立地について－。「瀬戸内技法とその時代」, 中・四国旧石器文化談話会, 243-252.
- 辻合喜代太郎・荻田昭次・浅田松次郎・桑原正明 1964 友井出土の須恵器と木片。「河内文化」11, 38-43.
- 中西克宏 1998 「宮ノ下遺跡第8次発掘調査報告書」, 東大阪市文化財協会
- 長瀬農業協同組合 1983 「郷土をたずねて」
- 那須孝悌・樽野博幸 1981 河内平野の生いたち。大阪市立自然史博物館第8回特別展解説書「河内平野の生いたち」, 4-25.
- 原田 修 1984 「高井田遺跡第2・3次調査報告」, 東大阪市文化財協会
- 1990 弥刀遺跡第4次調査報告。「山賀遺跡発掘調査報告書－付弥刀・瓜生堂・縄手・若江遺跡発掘調査概要－」, 東大阪市教育委員会
- 東大阪市教育委員会 1997 「東大阪市内埋蔵文化財包蔵地・指定文化財分布図」
- 別所秀高 1996a 層序及び遺跡形成過程。「宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書」第2分冊, 東大阪市文化財協会, 7-26.
- 1996b 「布施駅北口駐車場整備及び寝屋川流域調節池建設工事に伴う宮ノ下遺跡第2次発掘調査報告書」, 東大阪市文化財協会
- 1998 大阪府宮ノ下遺跡にみられる完新世の古環境。関西大学文学部地理学教室編「地理学の諸相」, 大明堂, 1-18.
- 藤井直正 1983 「東大阪市の歴史」, 松籟社
- 布施市教育委員会 1963 「高井田遺跡調査報告」
- 布施市史編纂委員会編 1962 「布施市史」第1巻。
- 平凡社 1986 「日本歴史地名体系第28巻 大阪府の地名II」
- 松田順一郎 1997 「宮ノ下遺跡東部における歴史時代の層序－地下埋設管工事に伴う宮ノ下遺跡第7次発掘調査報告－」, 東大阪市文化財協会

第2章 層序

本調査では、地表下4.6m（標高2～-2.6m）の地層を観察することができた。井関（1983）による沖積層区分にしたがえば、0mより上位が沖積陸成層、0mより下位は沖積上部砂層～中部シルト・粘土層に相当する。ここでは堆積層の初生的堆積構造や生物活動、物理的・化学的作用を含む後生的堆積構造から7種類の堆積相を認定し、その累重様式から堆積環境の変化過程をとらえた。堆積相のコードはAt（人為的堆積相）、Bm（後背湿地）、NI（自然堤防）、Lc（湖沼）、St（干潟潮上帯）、Tf（干潟潮間帯）、Bb（内湾浅海底）で表し、おのおのの堆積環境を表している。また、3時期の遺物遺構帯を認定し得たが、年代を明らかにできなかった層準については周辺調査地の考古遺物年代や¹⁴C年代を対比させた（図4）。調査地東壁断面および北壁断面を図5に示す。

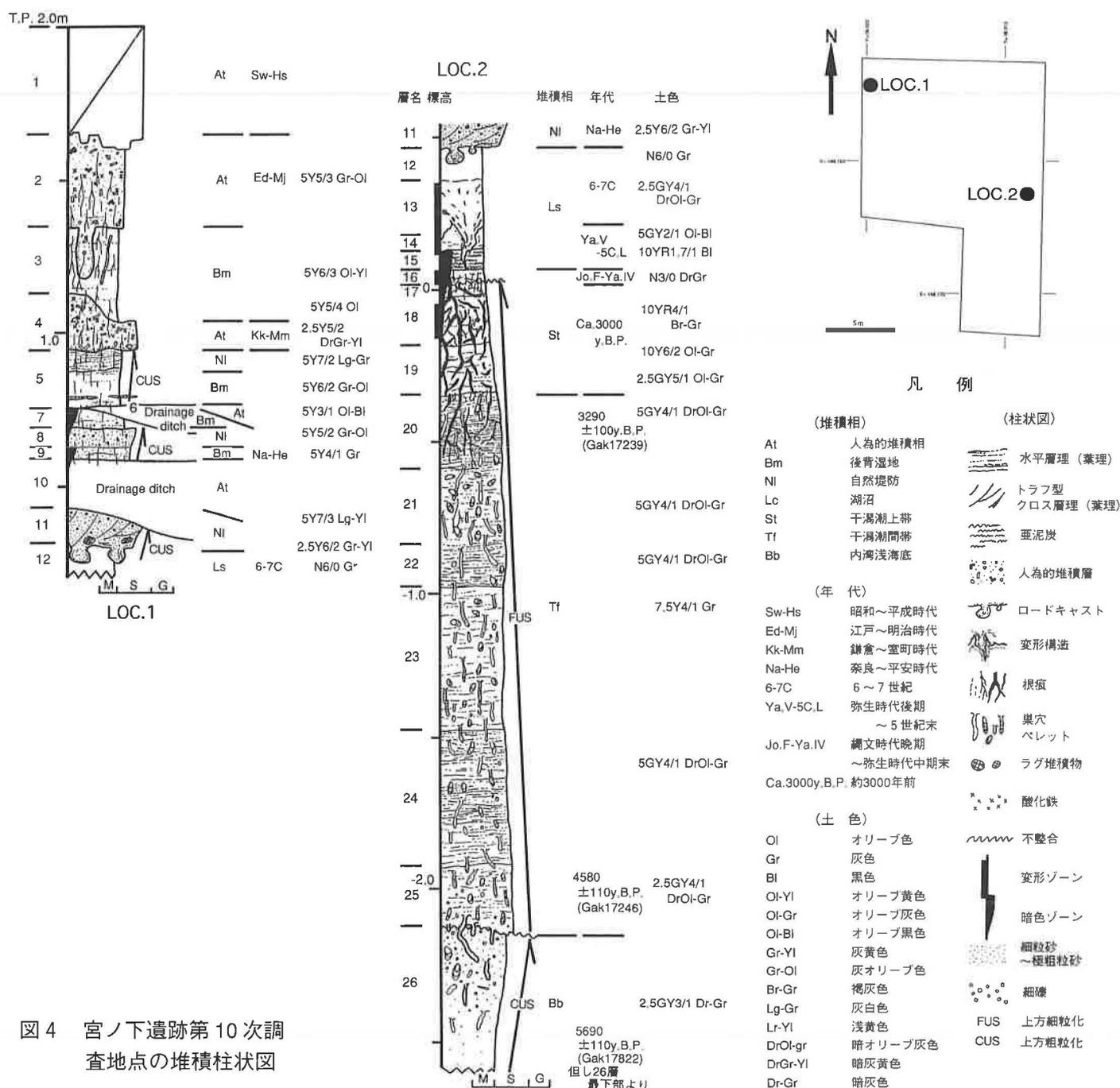


図4 宮ノ下遺跡第10次調査地点の堆積柱状図

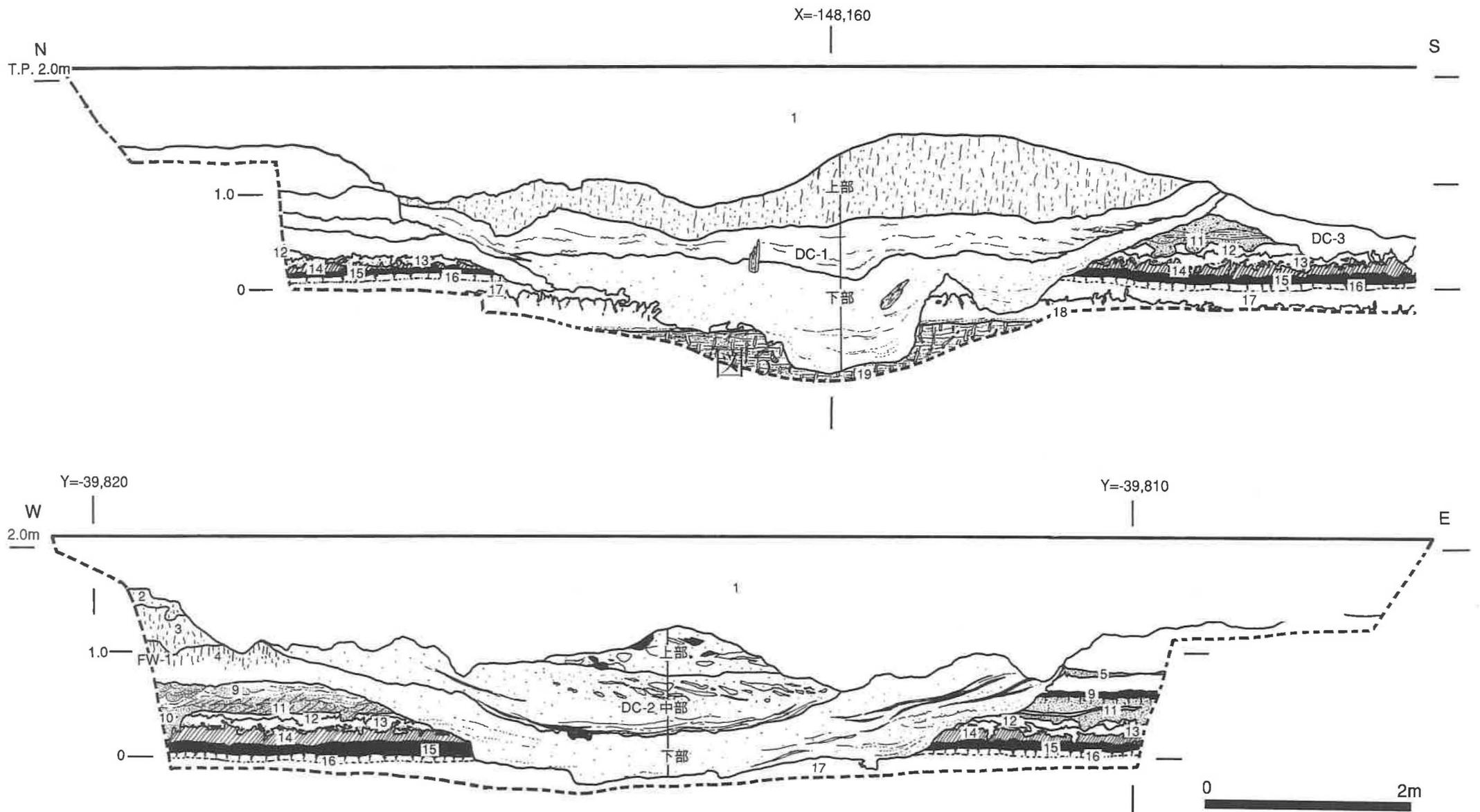


図5 調査地東壁断面（上）および北壁断面（下）

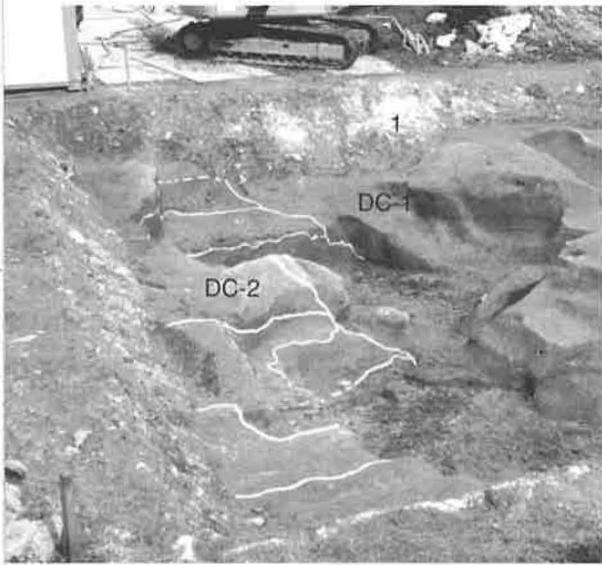


図6 1層除去後の遺構検出状況。昭和～現在の攪乱によって大部分が破壊されていた。大きな穴は既存建物の基礎杭の跡。北西より撮影。

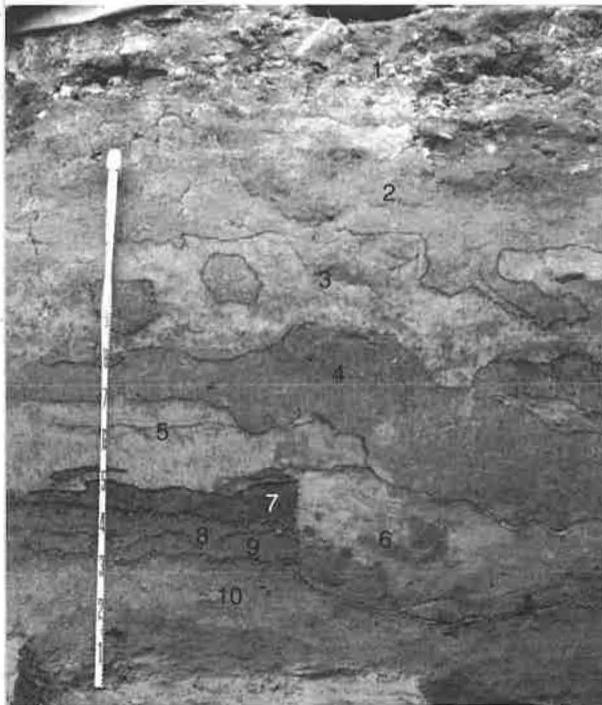


図7 調査地北西隅（西壁）の1～10層の堆積層。LOC.1。

[At] 人為的な堆積層で、下層との境界は不整合をなす。1層はマトリクスに間隙が目立ち砂質に富む。重機による攪乱が著しく、鉄筋、拳大～人頭大のコンクリート片などを含む。層厚は0.3～3 m以上。昭和時代後半～現在。調査地全域に分布する（図6）。

2・4層は初生的な堆積構造をとどめない砂混じりシルト。上部には団粒構造や酸化鉄の管状班紋が目立ち、2層には下位へ発達する根株の痕が、4層上部に畝状の高まりがみられることから畑地の作土層と考えられる。2層の造成年代はDC-1の開削年代とほぼ同時期と考えられる。出土遺物の年代からDC-1埋土上部は明治時代初頭（19世紀後半）、下部は江戸時代末期（19世紀前半）。2層からの出土遺物はみられなかったが、これらの年代から江戸時代末期～明治時代初頭に相当する。層厚は約30cm。4層からは鎌倉時代末期～室町時代中頃（14～15世紀）の出土遺物がみられた。層厚は10～20cm。

6・10層は偽礫を含み淘汰の悪い粗粒砂～極細粒砂。周辺の地下水位を下げるために掘られた溝の埋土。部分的に水平葉理がみられる。出土遺物はまったくみられなかったが、周辺調査地との対比から両層ともにおおむね奈良～平安時代の年代幅でとらえることができる。6層の層厚は約15cm、10層は約30cm。

2・4・6・10層は1層形成時にかなり削平を受け、調査地西北隅のみでしかみられない（図7）。

[Bm] 水平層理を示し僅かに砂が混じるシルト。堆積相Atによる削平が著しいが、後述する堆積相NIがおのおのの層間に挟まることから自然堤防の後背湿地の堆積環境が推測される。グライ化している3層および5層下部は水深のある静穏な水域で、有機物に富む7・9層は抽水植物が繁茂する水域で堆積したことがわかる。また、3層には酸化鉄の糸根状班紋や下限付近に盤状に分布する酸化鉄がみられることから、周辺の水位が下がったときに3層上面で水田耕作が行われていた可能性がある。

いずれも出土遺物がまったくみられなかったが、3層は上下層の出土遺物年代から室町時代中頃～江戸時代中頃の年代を、5層下部・7・9層は周辺調査地との対比から奈良～平安時代の年代を見積もることができる。層厚は3層が約20cm、5層下部が約15cm、7・9層が約5cm。3層は調査地北西隅に、5層下部・7・9層は調査地北西隅と北東隅に分布する（図7、8）。

[NI] 5層上部は細粒砂と極細粒砂～シルトの葉層の互層。8・11層は水平層理～トラフ型クロス層理を示す細粒砂～粗粒砂。いずれも逆級化構造をなす。洪水氾濫時の破堤および越堤堆積物、河道の流路州には、しばしば逆級化構造をなす堆積層がみられる（伊勢屋1982、増田・伊勢屋1985、鈴木1993、鈴木1994、鈴木1995）。このことや調査地西側に自然堤防状の微高地がみられること、本調査地点の堆積相には河道充填堆積物がみられないことから、本相は洪水氾濫時に

河道から後背湿地にもたらされた堆積物からなり、自然堤防の堆積環境が推測される。

層厚は5層上部・8層が約5cm、11層は10～20cm。11層下限にはロードキャスト (Reineck and Singh 1980, 松田1994) がみられる。主に調査地北西隅と北東隅に分布する (図7, 8)。いずれも出土遺物がまったくみられなかったが、周辺調査地との対比から奈良～平安時代の年代を見積もることができる。

[Lc] 水平層理を示す粘土質シルト。12・13層はグライ化層。14～16層は有機物に富み、15層中には未分解の植物遺体の葉層が挟まる。抽水植物が繁茂する好気的な水域から嫌気的な水域へ変化したことがうかがえ、水位の上昇をともなう静穏な湖沼の堆積環境が推測される。第1・2・4次調査地点では本調査地の17層上面より相対的な海水準低下によって削り込まれた開析谷 (いわゆる「埋積浅谷」) が検出されており (別所1996a, 別所1996b)、開析谷の充填堆積物に対比される16層と下層の17層とは不整合をなす。

層厚はいずれも5～15cm程度で、地点によって差異がある。部分的に後世による削平を受けているが、調査地全域に分布している (図8, 9)。周辺調査地との対比から12・13層は古墳時代後期～飛鳥時代 (6～7世紀)、14・15層は弥生時代後期～古墳時代後期 (1～6世紀)、16層は縄文時代晩期中頃～弥生時代中期末 (ca.2000～2800y.B.P) の年代を与えることができる。

13層中には下層の堆積物を引きずり上げた「開放型フレーム構造」(松田1997a) や14・15層へ貫入するフィッシャーが、16層中にはフレーム構造がみられ、地震イベントによる変形構造を示す。后者のイベントは第1次調査地点の開析谷充填堆積物中に確認された6回の地震イベント (松田・別所1995) のうち、1回もしくは2回以上の地震イベントに対比される。

[St] 水平層理を示す粘土質シルト。下部には極細粒砂の葉層が挟まる。下位の25層から17層にかけて穏やかな上方細粒化をなす。ヨシの茎や匍匐茎、根の痕がみられことから、好気的な環境下でかつ多量の懸濁物質がヨシの群落にトラップされる干潟の潮間帯上部～潮上帯の湿地の堆積環境が推測される。

15～17層までの層厚は約40cm。部分的に後世による削平を受けているが、調査地全域に分布している。周辺調査地との対比からca.3000y.B.P.前後 (縄文時代後期末～晩期初頭) の年代を与えることができる。

16層には地震イベントによる顕著なフレーム構造が観察される。大阪府文化財調査研究センターが実施した東大阪市若江北遺跡第5次調査でも、同じような環境下で同時期に起こった地震イベントが確認されている (松田1997b)。

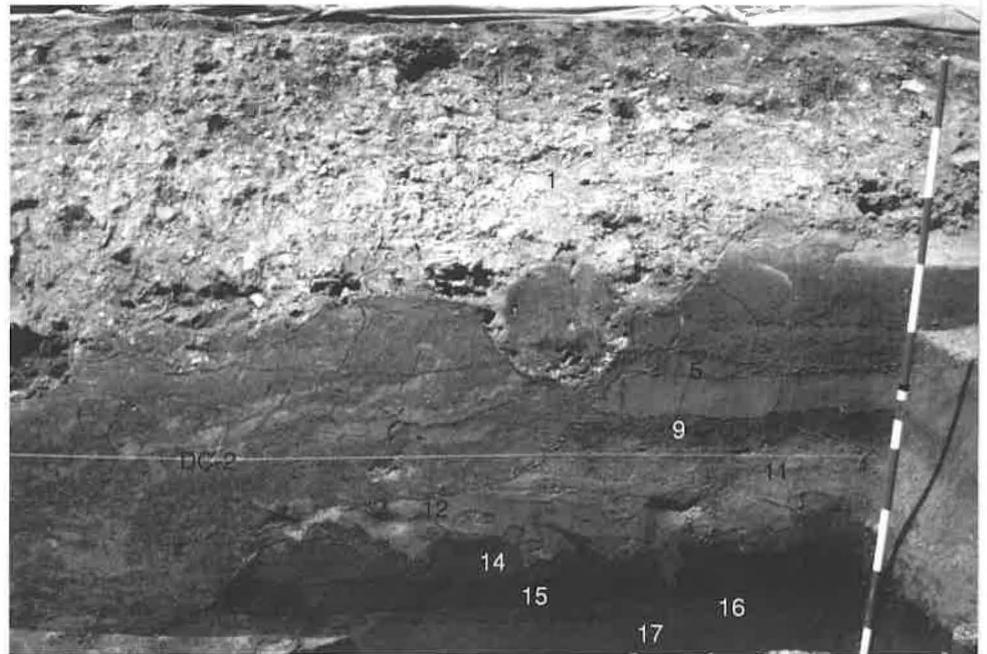


図8 調査地北東隅 (北壁) の1～17層の堆積層

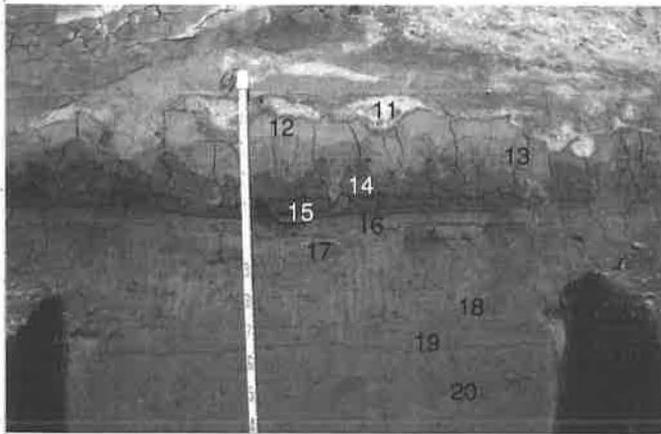


図9 東壁の11～19層の堆積層。LOC.2上部。

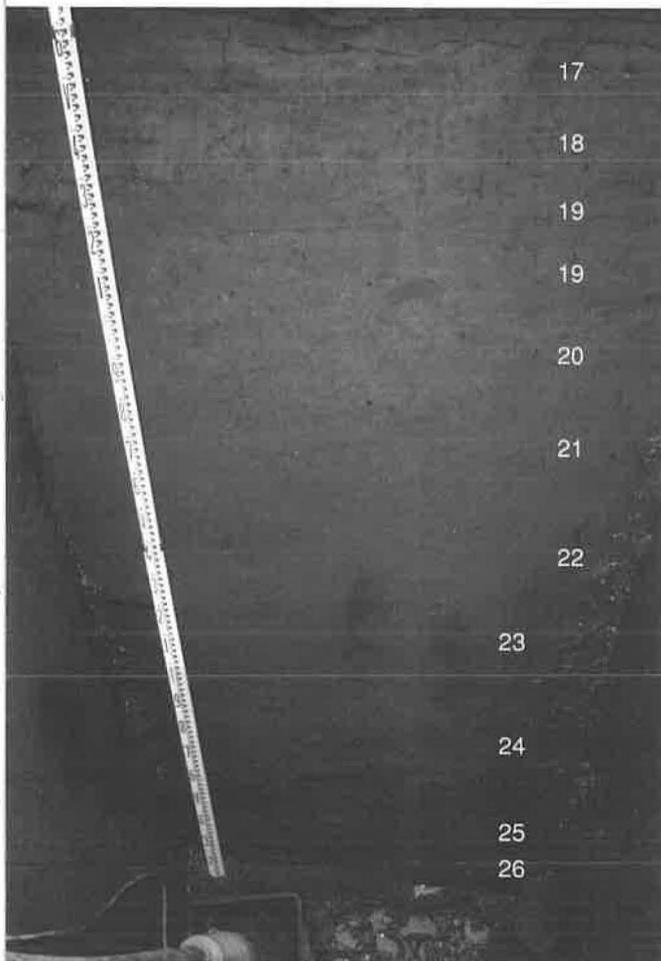


図10 東壁の18～26層の堆積層。LOC.2下部。

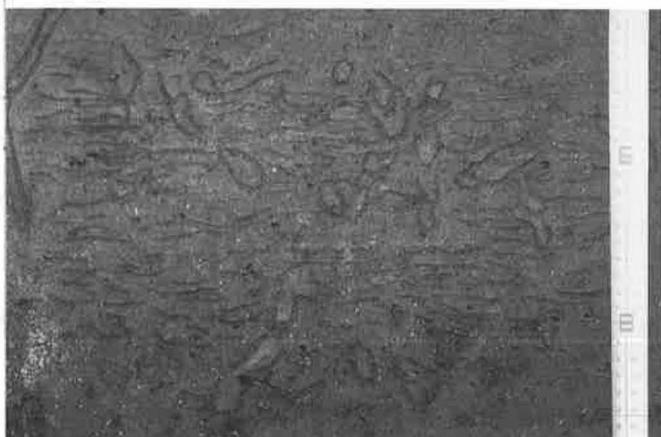


図11 貝によって擾乱された水平層理 (LOC.2の22層)

[Tf] 上方細粒化をなす細粒砂あるいは極細粒砂の層理と砂質シルトの葉層の互層。レンチキュラー層理を示し、著しい生物擾乱(図11)や根痕、とくに最上部の20層にはヨシの匍匐茎や根の痕が観察される。懸濁物質と掃流物質が交互に堆積し、生物活動が活発な干潟の潮間帯の堆積環境が推測される。25層は下層の26層を不整合に覆いやや砂礫を多く含んでいるが、これは急激な海水準低下によって内湾浅海底から干潟潮間帯へ堆積環境が急変し、陸域からの土砂供給を受けやすくなったためと考えられる。

ところで海水準が一定で陸域からの土砂供給が卓越していれば、その場の潮差とはほぼ等しい層厚をもつ潮間帯堆積層が沖側へ前進する。しかしながら、ここでみられた干潟の潮間帯堆積層は約2mの層厚をもち(図10)、現在の大阪湾の平均潮差約60cm(大潮差96cm, 小潮差24cm)を大きく上回っている。これは海水準上昇にともなう堆積場の移動と陸域からの土砂供給量が平衡を保ち、潮間帯堆積物が沖側へ前進するかわりに上方へ累重したためと理解され、この潮間帯堆積物の累重は海水準上昇の履歴を示している。堆積年代は周辺調査地との対比からca.4600～3300y.B.P.の年代を与えることができる。

[Bb] 上方粗粒化をなす細礫～中粒砂混じりシルト質粘土。貝による生物擾乱が著しく、堆積構造は不明瞭。初生的な堆積構造はマッシュで、シルト質粘土からなる内湾浅海底の堆積環境が推測される。生物擾乱やこれにともなって供給された砂礫は、海水準低下後の干潟潮間帯の堆積環境のもとで形成された後生的なものである。第1次調査地点の同じ堆積環境下でより下位の層準から採取した材の年代はca.5700y.B.P.を示していた。

以上の堆積相の累重から、古い順に内湾浅海底(約5～6000年前)→干潟(3000～4600年前)→湖沼(約1300～2800年前)→自然堤防/後背湿地(約1300年前以降)という堆積環境の変遷過程が認められる。このうち内湾浅海底から干潟および干潟から湖沼への堆積環境の変化は、約4600～5000年前と約2800～3000年前の海水準低下に起因し、その後の干潟の堆積層の累重(20～25層)や湖沼堆積物の累重(12～16層)はそれぞれ海水準の上昇と湖水準の上昇を示唆している。これら2回の海水準低下のうち前者は「縄文中期の小海退」(太田ほか1982)、後者は「弥生の小海退」(井関1983)と呼ばれ、主に北海道～本州にかけての太平洋沿岸の沈降および安定地域での報告例が多い(太田ほか1990)。また、陸化したのち(奈良時代以降)は堆積相N1やBmが挟まることからたびたび排水不良や洪水氾濫に見舞われていたようだが、それらを克服して2層や4層にみられるように土地を耕作地として利用するために人工改変が施されてきた。これらの耕作地は主

に図1に示した調査地西側の自然堤防上で展開していたと考えられる。

文 献

- 井関弘太郎 1983 「沖積平野」東京大学出版会, 145pp.
- 伊勢屋ふじ子 1982 茨城県, 桜川における逆グレーディングをした洪水堆積物の成因. 地理学評論, 55, 597-613.
- 太田陽子・松島義章・森脇広 1982 日本における完新世海面変化に関する研究の現状と問題—Atlas of Holocene Sea-level Records in Japan を資料として—. 第四紀研究, 21, 133-143.
- 太田陽子・海津正倫・松島義章 1990 日本における完新世相対的海面変化とそれに関する問題. 第四紀研究, 29, 31-48.
- 鈴木一久 1993 滋賀県野洲川の現世網状河川堆積物に見られる逆級化層理. 月刊地球, 号外 No.8, 152-157.
- 鈴木一久 1994 1993年9月9日野洲川洪水氾濫堆積物の3次元形態と堆積構造: 1回の洪水氾濫で形成された複数の逆級化ユニット. 地質学雑誌, 100, 867-875.
- 鈴木一久 1995 滋賀県野洲川, 現世河川堆積物の堆積史と洪水氾濫堆積物の堆積機構. 地質学雑誌, 101, 717-728.
- 別所秀高 1996a 層序及び遺跡形成過程. 「宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書」第2分冊, 東大阪市文化財協会, 7-26.
- 1996b 「布施駅北口駐車場整備及び寝屋川流域調節池建設工事に伴う宮ノ下遺跡第2次発掘調査報告書」, 東大阪市文化財協会
- 松田順一郎 1994 足跡とは似て而非なるロードキャストについて. 東大阪市文化財協会ニュース, No.6, Vol.2, 1-5.
- 松田順一郎 1997a 「鬼虎川遺跡北部の歴史時代耕作地跡と地震層序—国道170号線被服団地前交差点立体交差事業に伴う鬼虎川遺跡第38次調査報告書—」(財) 東大阪市文化財協会.
- 松田順一郎 1997b 若江北遺跡第5次調査地点でみられたさまざまな古地震痕跡. 「巨摩・若江北遺跡発掘調査報告書—第5次—都市計画道路大阪中央環状線巨摩橋交差点南行車線跨道橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」(財) 大阪府文化財調査研究センター, 141-159.
- 松田順一郎・別所秀高 1995 東大阪市宮ノ下遺跡の貝塚にみられる地震による変形構造. 日本文化財科学会第12回大会発表要旨集, 66-67.
- 増田富士雄・伊勢屋ふじ子 1985 「逆グレーディング構造」: 自然堤防帯における氾濫源洪水堆積物の示相堆積構造. 堆積学研究会報, 22・23, 108-116.
- Reineck, H. -E. and I. B. Singh 1980 Depositional Sedimentary Environments With Reference to Terrigenous Clastics, 2nd eds. Springer-Verlag, 84-94.

第3章 遺物・遺構

本調査地は昭和時代後半～現在の攪乱によってより下位の遺構や堆積層の大部分が破壊されていた(図6)のために、遺構の広がりをとらえることは困難であった。このため、攪乱を免れて残った遺構の輪郭線やその埋土、堆積層の分布状況から図12のような遺構の分布を復元した。

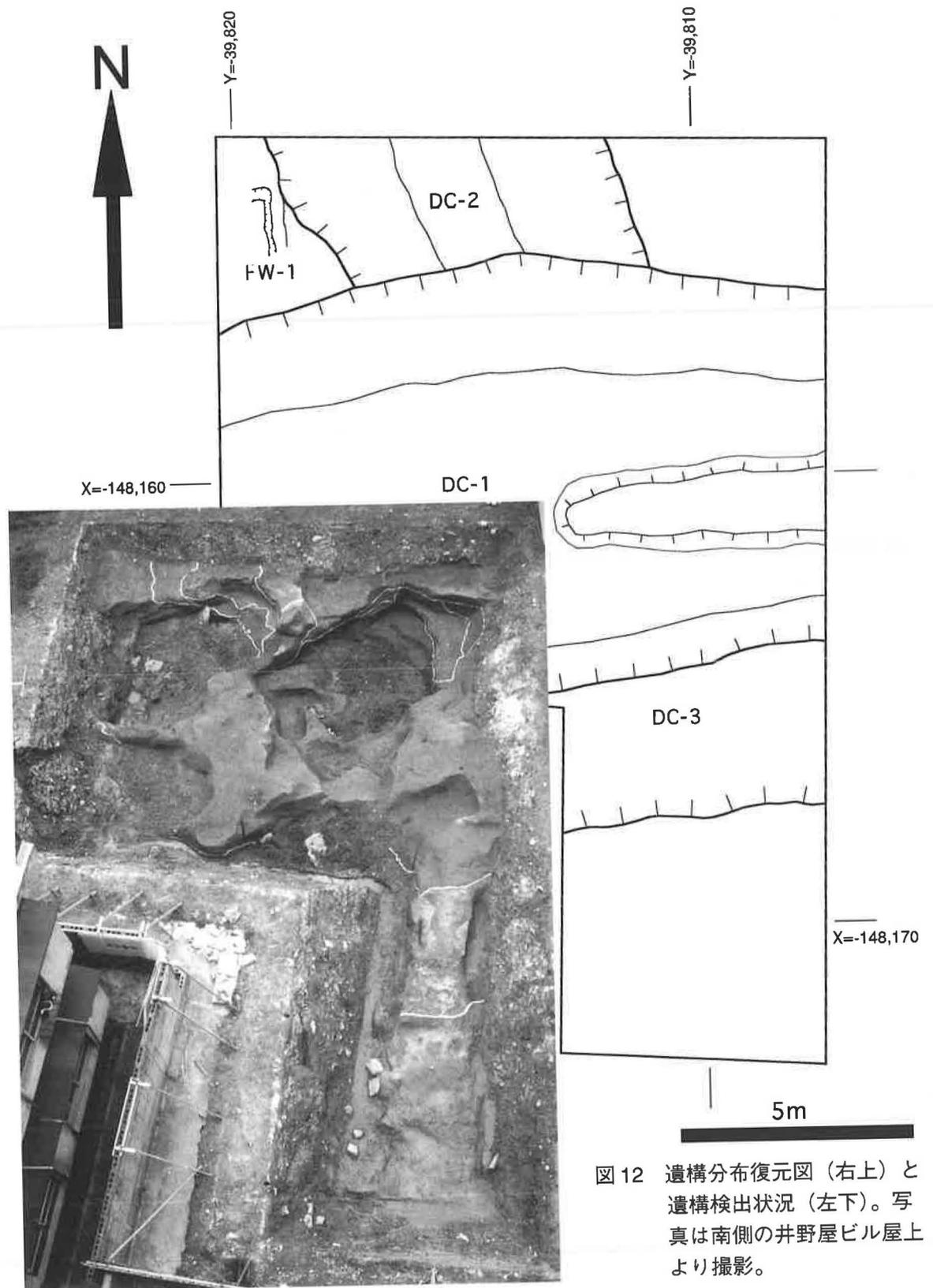


図12 遺構分布復元図(右上)と遺構検出状況(左下)。写真は南側の井野屋ビル屋上より撮影。

[DC-1] 幅9 m以上、深さ最大2.2m以上で東西方向にのびる溝。灌漑用に開削された水路と考えられる。東壁断面には拡幅時の掘り残しと思われる島状の高まりがある(図13)。溝内の谷壁沿いには斜面を崩落した堆積物がみられるが上部は団粒構造や酸化鉄の管状班紋が発達し、堆積相Atを示す。下部は細粒砂の水平葉理がしばしば挟まるシルトで、堆積相Bmを示す(図14)。下部からはヒシの子葉が多数産出する(図15)ことから溝は常に冠水し、流れがあまりなかったことがうかがえる。

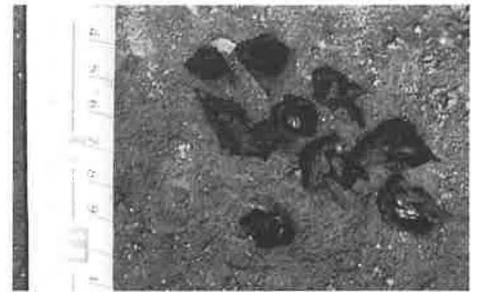


図15 DC-1下部で検出したヒシの子葉



図13 DC-1の横断面(東壁)。掘り残しと思われる島状の高まり(矢印)がみられる。



図14 調査地北半中央部の南北トレンチでみられたDC-1の堆積層。上部は人為的な堆積相、下部は後背湿地の堆積相を示す。

上部からは19世紀後半(明治時代初頭)の棧瓦や丹波焼の甕、京焼の行平鍋・徳利、唐津焼の椀、伊万里焼の椀、漆器椀などが出土した。また、これらに混ざって古代の須恵器の甕やや古い唐津焼の陶器が出土した(図16, 17)。下部からは19世紀前半(江戸時代末期)の瓦や備前焼の摺鉢、伊万里焼の椀、焙烙、鉄鍋などが出土した(図18)。

以上より江戸時代末期に灌漑用の水路を開削し、掘り上げた土砂を周辺に盛って畑(2層)を造成していたことがわかる。また、下部からはヒシの子葉が多数産出したことから、灌漑のほかに食用のヒシが栽培されていた可能性がある。さ



図16 DC-1上部出土漆器椀。スケールは1/2。

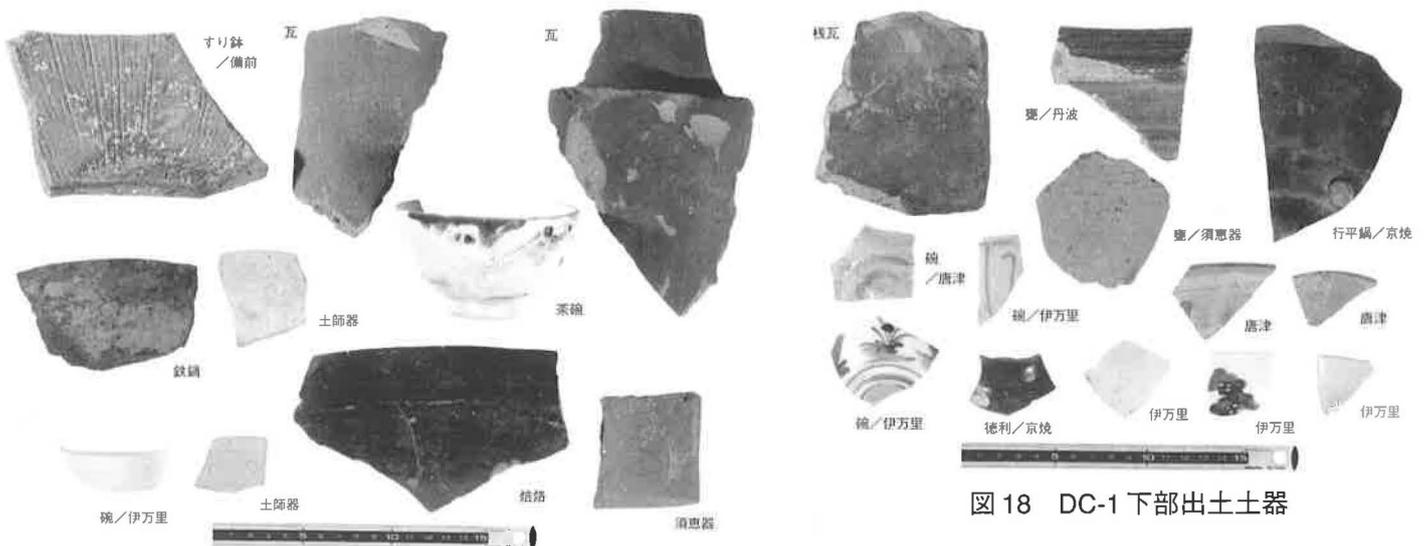


図18 DC-1下部出土土器

図17 DC-1上部出土土器

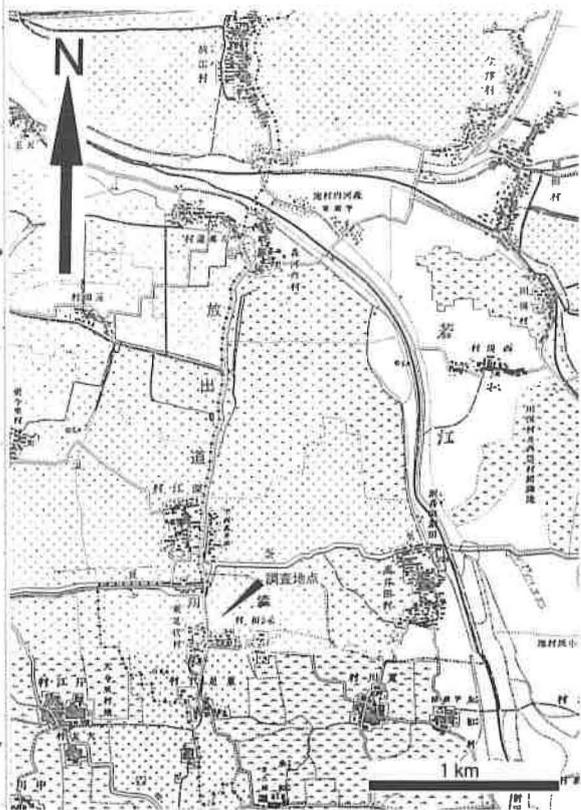


図19 「放出道」周辺にみられる水路およびため池。明治20年発行仮製2万分の1地形図「大阪」「天王寺村」に加筆

らに明治時代になると溝を埋め立てて平坦化し、周辺と同様に畑として利用された。明治20年に発行された仮製2万分の1地形図「大阪」「天王寺村」によれば、東足代村から森河内村の間の「放出道」の周辺にはいくつかの灌漑用の水路やため池が表記されているが、本調査地点にはこれらの表記がみられず、測量がおこなわれた明治18年までにはこの溝は埋め立てられていたようだ(図19)。

[DC-2] 幅6~7m、深さ1.2m以上で南北方向にのびる溝。埋土は上・中・下部の3つに大別される(図20)。下部は淘汰の悪い砂質シルトのマトリクスに直径1cm~人頭大の粘土質シルトの擬礫が多数分布し、堆積相Atを示す。谷壁部には傾斜に対して平行な厚さ5~10cmのシルト質の水平層理がみられるが、よく観察するとシルト質の擬礫が圧密を受けて側方へ水平層理状に並んでいることがわかる(図21)。中部は、その下底が堆積相Bmを示す粘土質シルト、より上位は淘汰の悪い泥混じり極粗粒砂~細粒砂のマトリクスに直径2、3cm~拳大のシルト質の擬礫が多数分布し、堆積相Atを示す。溝中央部はとくに砂質が卓越する。上部は淘汰の悪い砂質シルトのマトリクスに直径1cm~拳大のシルト質の擬礫が多数分布し、堆積相Atを示す。酸化鉄の斑紋がめだつ。

下部からは15世紀前半頃の瓦質火鉢や備前焼の甕に混ざって、13世紀頃の東播系須恵器のこね鉢や土師器、瓦器、弥生土器が出土した(図22)。中部からは15世紀後半頃の土師皿や瓦器小皿に混ざって、14世紀頃の備前焼の摺鉢や須恵器の甕、弥生土器などが出土した(図23)。上部には出土遺物はみられなかった。

室町時代中頃に開削された溝であるが偽礫が多数みられことから開削後すぐに埋め戻され、平常時は浅い窪地になっていたと考えられる。また埋土が3層に分かれることから開削と埋め戻しの作業が少なくとも3回は繰り返されたことがうかがえる。おそらく、洪水氾濫後に周辺の水位を下げるために設けられた一時的な排水溝であろう。

[FW-1] 幅約25cm、高さ約10cmの畝跡。調査地北西隅で検出した(図

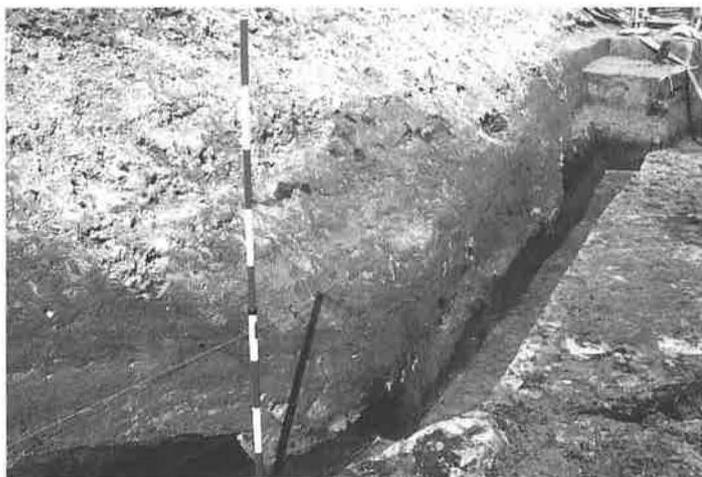


図20 DC-2の堆積層(北壁)。偽礫が多数みられ、人為的な堆積相を示す。



図21 DC-2の東側谷壁付近。よく観察すると偽礫が水平層理状に側方に連なっているのがわかる(矢印)。



図22 DC-2 下部出土土器



図23 DC-2 中部出土土器

24, 25)。作土層は淘汰の悪い砂混じりのシルトからなり、団粒構造がしばしばみられる。直下の5層上部の砂質堆積物と5層下部の泥質堆積物を攪拌して造成したと考えられる。作土層からは14～15世紀頃(鎌倉時代末期～室町時代中頃)の瓦器碗や土師器が出土した(図26)。また、FW-1は室町時代中頃に堆積相Bmの泥質堆積物に覆われることから周辺が冠水して耕作ができなくなったことがうかがえ、この時に水位を下げるために先述のDC-2が掘られたのだろう。

[DC-3] 幅3.5m以上、深さ30cm以上。後世にDC-1によって削平されたため、一部しかとどめていない(図27)。出土遺物はまったくみられなかった。



図26 FW-1 出土土器。
(中段左・下段左・中は土師器。それ以外は瓦器。)



図24 FW-1。調査地北西隅で2条の畝を検出した。



図25 FW-1の垂直断面。直下の5層上部の砂と同下部の泥を攪拌して作られたと考えられる。

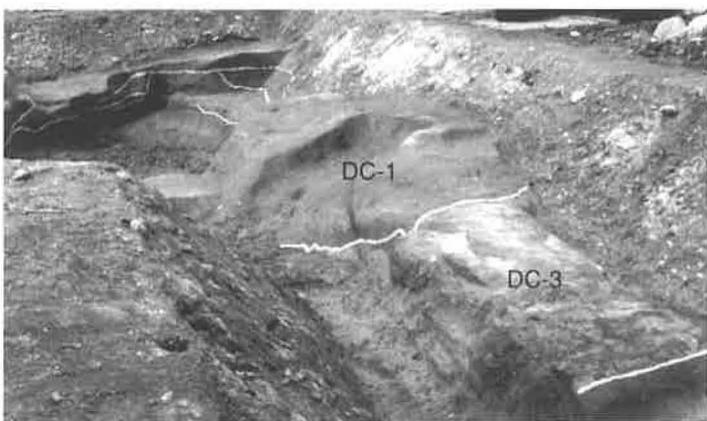


図27 大部分を後世のDC-1に削平されたDC-3

第4章 まとめ

宮ノ下遺跡第10次調査は同遺跡推定範囲の北西隅で実施し、ここでは1・2次調査で明らかになった内湾浅海底→干潟→湖沼→自然堤防/後背湿地という堆積環境の変遷過程を再確認した。また、奈良時代以降たびたび洪水氾濫や排水不良に見舞われながらも、洪水氾濫で流路から供給された土砂や排水不良で溜まった泥を用いて鎌倉時代末期～室町時代中頃と江戸時代末期～明治時代初頭には畑地の作土層が作られたことや、周辺の水位を下げるために奈良時代～平安時代および室町時代中頃には溝(DC-2)が、江戸時代末期～明治時代初頭には灌漑用の水路(DC-1)が設けられていたことが明らかになった。

今回の調査成果やこれまでの調査成果を考えあわせると、宮ノ下遺跡周辺では奈良時代以降に北方へ流れる旧大和川の分流が流入し、さらにある時期に現在の近鉄布施駅付近から東方へ分流ないしは流路変更した。これらの流路に沿って自然堤防が発達したが、本調査地点では鎌倉時代以降の堆積層に逆級化構造をなす破堤ないし越堤堆積物がみられないことから、平安時代末頃までには旧大和川水系とは分断され、流路の水位が低下するとともに上流からの土砂供給が途絶えたようだ。同時に自然堤防上の地下水位の低下は畑地の展開には好条件となり、耕作地造成のために入植が始まり、集落や道、耕作地が成立したと考えられる。おぼろげながら奈良時代以降の宮ノ下遺跡周辺は、旧大和川分流路の自然堤防上のもっとも高いところに道や家屋が建ち並び、その背後の緩傾斜地には畑地が、より低いところでは水田が展開するような景観が想定される。

このように宮ノ下遺跡の西縁を北方へ流れていた旧大和川分流路は古代の集落成立に深くかかわっていたことから、この分流路を土地の名前を冠して「足代分流路」と称したい。足代分流路はおそらく奈良時代の早い時期に現在の東大阪市衣摺付近で旧大和川の一分流である長瀬川と分かれ、まっすぐ北上して大阪市鶴見区付近で旧淀川の分流と合流し、流れを西にかえて大阪湾に注いでいたと考えられる。

報告書抄録

ふりがな	びるけんせつこうじにともなうみやのしたいせきだい10じはくつちょうさほうこくしょ
書名	ビル建設工事に伴う宮ノ下遺跡第10次発掘調査報告書
副書名	東大阪市足代地域における足代分流路の形成と歴史時代の人間活動の変遷
巻次	
シリーズ名	
編著者	別所秀高
編集機関	財団法人東大阪市文化財協会
所在地	〒577-0843 東大阪市荒川3丁目28-21
発行年月日	1999年3月31日
遺跡名ふりがな	みやのしたいせき
所収遺跡名	宮ノ下遺跡
所在地ふりがな	ひがしおおさかしちょうどう
所在地	東大阪市長堂1丁目64-6
市町村コード	27227
遺跡番号	125
北緯	34° 39' 45"
東経	135° 33' 59"
調査期間	1998.04.28 - 1998.05.29
調査面積	100m ²
調査原因	ビル建設工事
主な時代	江戸時代後期～明治時代初頭／鎌倉時代～室町時代
主な遺構	灌漑用水路／畑
主な遺物	土器・漆器／土器
特記事項	

宮ノ下遺跡第10次発掘調査報告書

—ビル建設に伴う発掘調査—

発行年月日 1999年3月31日

発行所 財団法人 東大阪市文化財協会

〒577-0843 東大阪市荒川3丁目28—21

印刷所 株式会社ドウミ印刷広研社

〒578-0937 東大阪市花園本町2丁目9—11

紙質 表紙・本文 ニューエイジ157g/m²

The 10th excavation report of
Miyanoshita Site, Higashi-osaka City, Japan
Development of Ajiro distributary and human activity changes in historical age

April 1999

Association for Higashi-osaka City Culutural Heritage